

釈尊の故郷に再びよみがえる仏教の精神

禪定林大本堂落慶

インド

二月八日、インド・禪定林(サンガラトナ・法天・マナケ住職)大本堂の落成落慶法要が厳かに執り行われ、日本からは、天台座主名代延暦寺一山真蔵院住職森川宏映探題大僧正はじめ、濱中光礼天台宗宗務総長、清原恵光延暦寺執行、叡南寛範毘沙門堂門跡門主ら二百五十名が訪印し、天台宗の教義に基づく大乘仏教の一大道場の落慶を祝った。

森川探題大僧正を導師に落慶法要

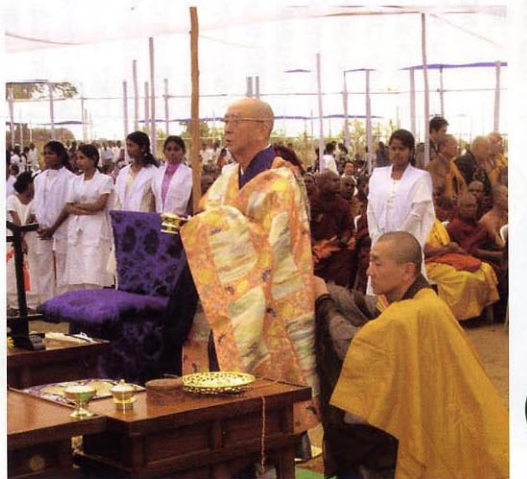
インド全土から十五万人随喜

禪定林本堂は、インドの中心部ナグプールから車で二時間程のところにあるルヤード村で建設作業が進められていた。本年が仏誕二五五〇年、インド仏教再興五〇年、禪定林開設二〇年にもあたり、天

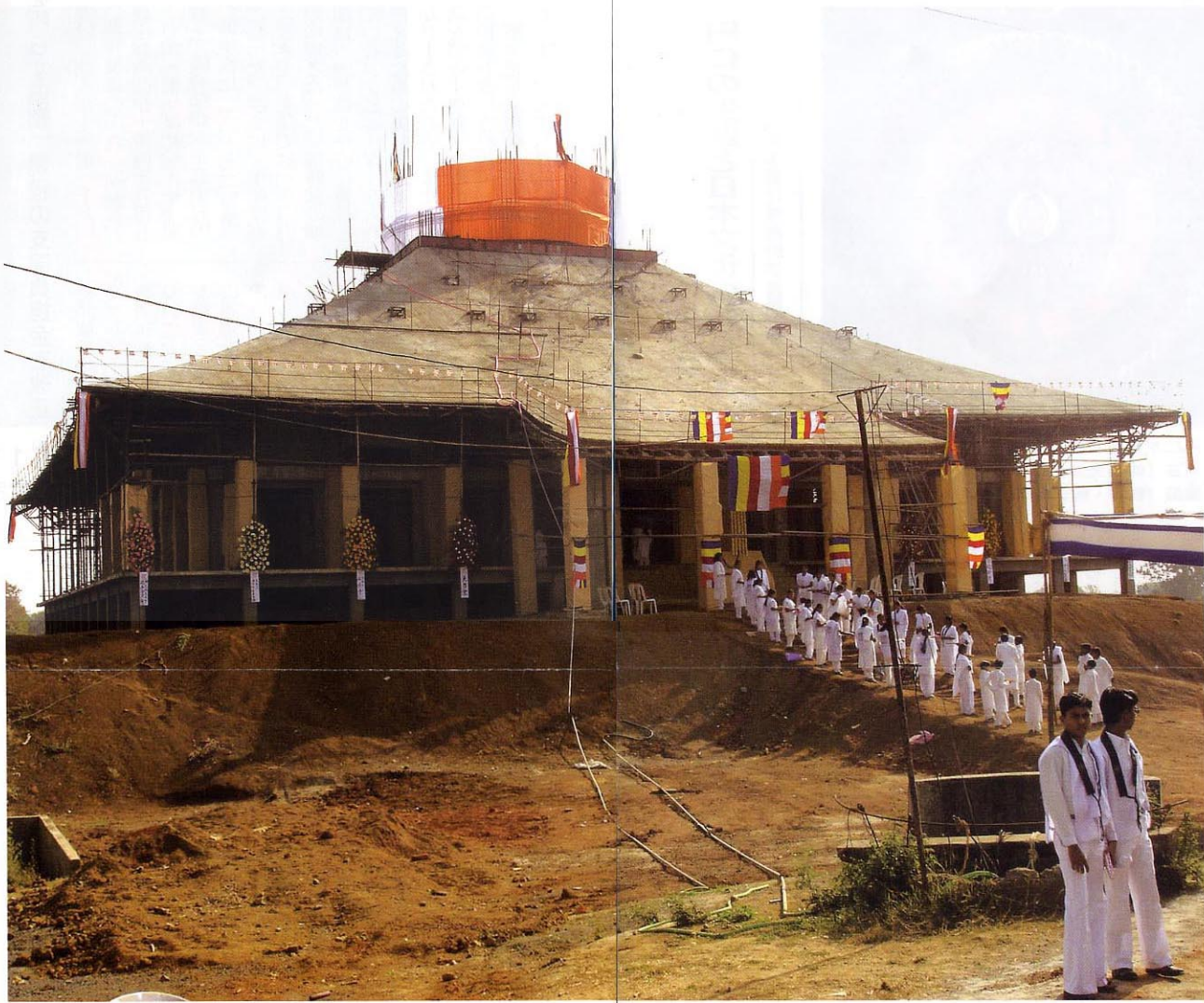
台宗開宗千二百年慶讃大法会の記念事業として、サンガ師を中心に大本堂建立委員会、パンニヤ・メツタ協会日本委員会(PMJ)の協力のもと建設が進められていた。しかし、昨年の雨季は例年

になく降水量が多く、建設中の本堂一帯は洪水に見舞われ、作業の中断を余儀なくされ、工事に多大な影響を及ぼした。

八日午前、禪定林に隣接するシンドフリ、ルヤード村に分散し出仕僧が参集。群馬雅楽団による雅楽が響き渡る中、行列を組んで禪定林へ。



禪定林大本堂落慶百味百僧四箇法要が森川探題大僧正の導師で厳かに執り行われた



禪定林大本堂は東を向いている。「禪定林の本尊さまの奥向こうには智恵山があり、さらに東へ行くと仏跡があります。さらにもっと東の日本にまで至ると、総本山比叡山延暦寺があります」とサンガ住職は言う。大本堂建立は新たな活動のスタートとなった

本尊釈迦牟尼仏の開眼法要厳修

叡南門主を導師に



テープカットに臨む濱中総長とサンガ住職

落慶法要と並行して叡南門主を導師に本尊釈迦牟尼仏、協侍の伝教大師像・仏教復興の祖アンベドカル博士像の入

仏開眼法要が執り行われた。落慶法要後、禪定林開教第一世住職普山奉告法要と各国土落慶法要として、インド・ス

リランカ・タイ僧侶による上座部式法要、チベット式法要、PMYI式法要も営まれ、すべての法要終了後、大本堂横の特設ステージで群馬教区有志による音楽、寺庭婦人による奉詠舞、インド式、チベット式の音楽や劇が華やかに繰り広げられた。

今回の落慶にあたりサンガ住職は「インド人の顔をした私が日本僧と同じ作務衣を着てインドを歩む姿は奇異に映りこそすれ、日本にもインドにも同胞としての認識は芽生えない。自分の居場所を模索し、紆余曲折を繰り返して、活動を継続する中でインド人でも日本人でもない、世の中に二人といない自分が肯定的に生きるからこそ私の運命だと自覚し、志を同じくするインド及び日本人の代表として活動を進めようと決心した。そして二十年にわたる活動の集大成として大本堂建立

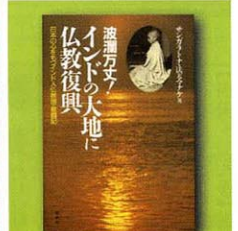
に至ったのである。「インド仏教の心の拠り所とし、伝教大師のみ教えのもと、日本をはじめ諸外国の修行者を受け入れ、未来に法を伝える菩薩僧を養育していきたい。また、智慧と慈悲を兼ね備え、世界平和を祈る依所とするために精進していきたい」と、決意を新たにしていた。

本堂落慶を記念して——サンガ師「半生の記」を出版

禪定林本堂の落慶を記念して住職のサンガ師が「波乱万丈! インドの大地に仏教復興」と題する本を出版した。

わずか九歳でインドから来日し、以後、比叡山延暦寺で厳しい修行と仏教を学ぶ日々を送る。十五年後、再び故郷に戻り、仏教生誕の地インドで、仏教を再興するために命をかけるサンガ師の苦闘の半生をつづった本である。

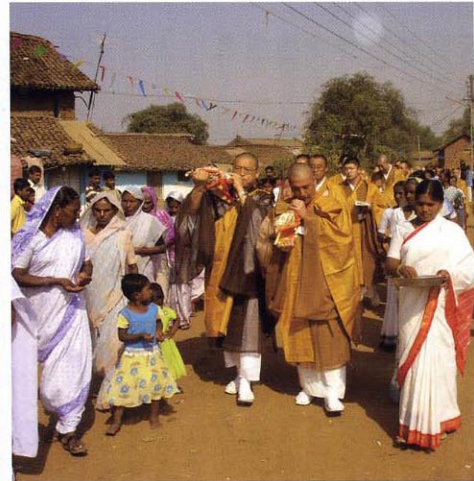
師はインドの中心部ナグプールに生まれた。誕生にあたってのこんなエピソードが記してある。体を毀したチベット僧を介



春秋社刊・¥1800+税



この日のために、インド全土から約十五万人の仏教徒が集まり、ともに落慶を喜び合った



禪定林大本堂に向かう出仕僧の行道。日本人僧の奏でる法螺の音もインドの人々には物珍しい

禪定林大本堂前にて、森川探題大僧正、濱中宗務総長、叡南門主、サンガ師によるテープカットが行われた。この日を待ちわびていたインド全土から詰めかけた仏教徒十五万人が見守り歓喜の渦に包まれるなか、禪定林大本堂落慶百味百僧四箇法要が森川探題大僧正を導師に濱中総長、清原執行ら百名の僧侶が出仕して厳かに執り行われた。大本堂は開宗千二百年に因み千二百名が収容できるようになっており、インド仏教徒の精神的象徴となり、世界平和の祈りの場となった。また、本尊に向かい合掌すると、遠く比叡山を望むように設計されている。